

開学20周年記念号の刊行にさいして

経済学部長 高橋 衛

いま、経済学は、そのレーゾン・デートルが問われているというべきかも知れない。平成不況からの脱却が意想外にもたつき、景気の前途は、不透明のままにすぎている。その処方箋を描くことに経済学は無力感をすら禁じえない。「何びとも否定できない経済的疾患を癒すために考えられた実際的政策こそ、ついにケインズをして、その理論へと導くにいたったのである」と、かつてローレンス・クラインは書いた。いわゆる「ケインズ革命」の確認に他ならなかった。いま、経済学は、ふたたびそのような課題に直面しているというべきなのであろうか。

本誌が創刊されたのは、昭和51年1月であり、以後、現在までに29号を発行しつづけてきた。かならずしも多くないスタッフによって刊行をつづけてきたことには、先学諸氏の多くの労苦を偲ばせるものがある。今後も内容の充実をはかりつつ、刊行の継続を期していることはいうまでもない。当論文集は、うえのような課題をも意識しつつ、しかも、あまりに性急な解答に促迫されることなく、研究の成果の一端を世に問うものである。

福山大学は今年、開学20周年を迎えた。当論文集は、多くの開学記念事業の一環として刊行された。当経済学部が立地する福山市は、「地方拠点都市」に指定され、周辺の備南地域とともに、ユニークな地場産業と、その国際化をふくめての進展をとげつつある。当学部の研究と教育が志向するところも、広く世界経済をも視野におさめつつ地域経済の発展に貢献せんとするところにある。当論文集も、このような視座から編集された。いささかの寄与をはたせれば幸いである。